



不老橋(和歌山県指定文化財)
和歌山市和歌浦、1851(嘉永4)年架橋、橋長14.7m、径間9.6m、橋幅4.2m 写真提供/加藤 元昭

旧熊本藩主 細川家の古文書から判明 不老橋は

岩永三五郎 最晩年の作

美里町文化財保護委員会委員長
日本の石橋を守る会熊本県会員

長井 勲

近世後期、肥後を代表する石工として、名声揺るぎない岩永三五郎(※1)。その最晩年の行跡がこのほど判明した。紀州・和歌山藩から招かれ、1851(嘉永4)年に現在の和歌山市で目鑑橋の架橋を行ったという記録を発見したのである。

その記録は肥後・熊本藩の歴代藩主、細川家所蔵の歴史資料などを収蔵する「永青文庫」(熊本大学附属図書館寄託)所蔵、「新統跡覽(せきらん)」の嘉永4年の一冊にあった。これは熊本藩の対外関係(徳川幕府や他藩との交渉・応接など)を収録したもので、本来、土木工事や石橋架設などが収録されるものではない。そのためこれまで、岩永三五郎の行跡が明らかにされなかつたのである。

「…紀州和歌宮御旅所江石橋御取拵二付内分御国許石工御雇入二相成…」
「右御取拵之儀二付而紀州様大坂御留守居より頼談之趣同所御留守居方より別紙之通達有之…」とある。

これは紀州・和歌山藩の大阪留守居役(玉置長次郎)が、熊本藩の大阪留守居詰目付(黒川才右衛門)に宛て、紀州・和歌宮御旅所(※2)に目鑑橋を架設するため、石工を雇いたいというのである。嘉永3年12月4日の依頼で、翌年4月14日の祭礼の日に前藩主の渡り初めをしたいので、急いで石橋

を架設したいというのである。

ここで熊本藩と紀州・和歌山藩との間に立って世話をしたのが、大阪の商人、鴻池(ここのいけ)伊助だった。公的な人材派遣になると、藩庁の許可に時間がかかり依頼に間に合わなくなるため、嶋池伊助がまず石工を雇い入れ、和歌山藩に派遣するという方法を取ったのである。雇い入れた石工は岩永三五郎、養子の大蔵、小者の鹿吉。この3人は嘉永4年1月22日に大阪へ到着。24日には紀州へと出発している。

「…石橋御都合能致成就御祭礼之御間二合殊更一位様思召二相叶彼は三家御満足之由…」この資料に目鑑橋の完成日は記されていないが、4月14日の和歌宮祭礼には石橋は完成し、奉行の渡り初めがあり、橋の出来に大満足の様子が記してある。

岩永三五郎は最晩年、和歌山藩から招かれ城下に目鑑橋を架け、肥後の石工の面目を世に顕(あらわ)した。三五郎の指導の下に紀州石工たちが架けた橋は、現在も「不老橋」(※3)という名で立派に残っている。

※1 岩永三五郎は帰郷後の嘉永4年10月5日に他界、享年59歳だった。

※2 「和歌宮御旅所」とは、徳川家康や紀州徳川家初代頼宣を祀(まつ)る紀州東照宮の祭礼「和歌祭」の際の御旅所のこと。石橋は祭礼の際、東照宮関係者などが通る「お成り道」に架けられている。

※3 勾欄の雲形の浮き彫りが見事。この部分は石屋忠兵衛が制作したと推定されている。

中面の案内

2面 第32回大会で部の創設が決まる
5面 いま、石橋の時代(片寄 俊秀)

3面 日本の石橋一覧表を作成
6面 石橋構築・修復技術者育成講座を準備

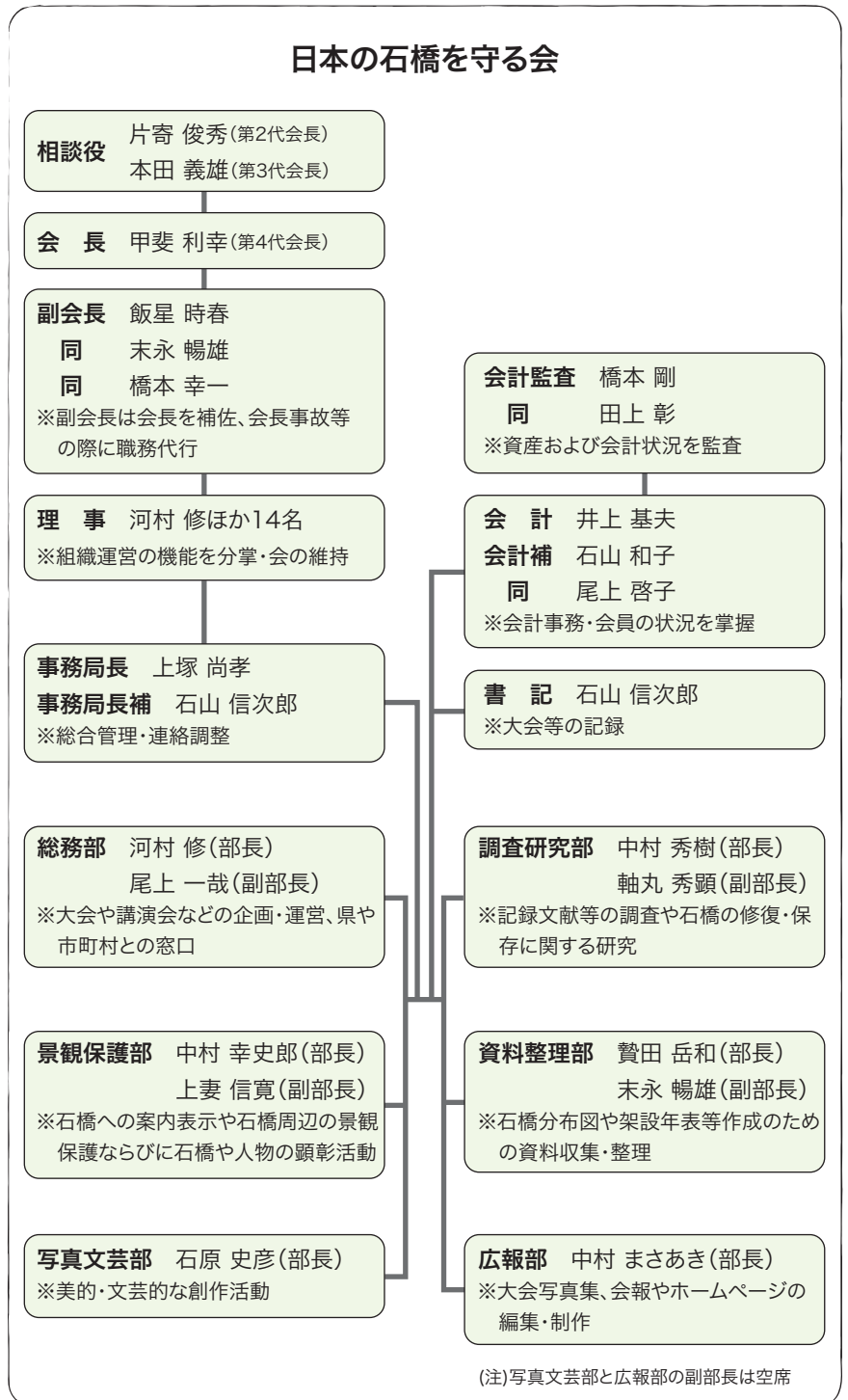


第32回大会会場の様子(撮影/高田 久壽)

「日本の石橋を守る会」の第32回(平成23年度)大会が、去る4月23・24日の2日間、熊本県上益城郡山都町の国民宿舎「通潤山荘」で開催された。1日目の通常総会には会員47名が参加し、来賓として、熊本県上益城地域振興局局長の船原幸信氏、山都町教育委員会教育長の山下明美氏、通潤地区土地改良区理事長の本田陽一氏が出席。通常総会では、昨年度の事業・決算・監査報告、本年度予算案などが提出され、それぞれ承認された。総会の新たな議案としては、会則改正案とともに会の活動を支えるための部の設置が提案され承認された。

第32回大会を熊本・山都町で開催

(図) 設置した部の役割・機能



会の活動を支える部の創設

第32回大会では会則第12条(職掌分掌)を改正し、新たに各部が創設された。「(1)事務局長」「(2)会計」「(3)書記」についてはこれまで通りであるが、「(4)広報」「(5)その他の必要な機能」を変更し、「(4)総務部、(5)景観保護部、(6)写真文芸部、(7)調査研究部、(8)資料整理部、(9)広報部とした。右図は「設置した部の役割・機能」(※各部に期待される機能)と、各部の部

長と副部長名である。

質の高い報告が続出

大会1日目に行われた報告会では、10名の会員が活動内容を披露。それぞれ質の高い報告が行われた。

全国の石橋発見報告

会員 贄田 岳和(宮崎県) 贄田 会員はこの1年間に、4基の石造

アーチ橋を発見、5基の移築・撤去情報や、熊本県人吉市の西目林道の5基など、15基の貴重な石造アーチ橋を確認したことを報告した。「もうないだろうと思っても、結構出てきます」「発見の喜びが次の発見の動機です」と語った。

贄田 会員のホームページは、「nienmon」で検索すると表示される「石橋・眼鏡橋・太鼓橋・石造アーチ橋」。

日本の「めがね橋」～都道府県別数～

都道府県	現存	復元	総数(現存+復元)	割合	消失数	煉瓦アーチ
沖縄*	32	2	34	1.7%	0	0
鹿児島*	451	7	458	22.5%	48	35
宮崎*	173	3	176	8.7%	85	18
熊本*	324	31	355	17.5%	295	23
大分*	495	6	501	24.6%	43	4
長崎*	149	16	165	8.1%	3	31
佐賀*	53	2	55	2.7%	0	36
福岡*	77	0	77	3.8%	0	103
高知	4	1	5	0.2%	0	1
愛媛	2	1	3	0.1%	0	3
徳島	5	0	5	0.2%	0	0
香川	2	1	3	0.1%	0	0
山口	7	0	7	0.3%	0	12
広島	5	0	5	0.2%	0	3
鳥取	0	0	0	0.0%	0	1
岡山	3	1	4	0.2%	0	6
山梨	1	0	1	0.0%	0	17
兵庫	8	2	10	0.5%	0	37
和歌山	2	0	2	0.1%	0	17
奈良	0	0	0	0.0%	0	5
大阪	2	0	2	0.1%	0	49
京都	17	0	17	0.8%	0	35
滋賀	4	0	4	0.2%	0	76
三重	6	0	6	0.3%	0	19
愛知	3	1	4	0.2%	0	8
岐阜	5	0	5	0.2%	0	39
福井	2	0	2	0.1%	0	2
石川	8	0	8	0.4%	0	1
新潟	9	0	9	0.4%	0	0
長野	9	0	9	0.4%	0	6
山梨	5	0	5	0.2%	0	4
静岡	14	0	14	0.7%	1	17
神奈川	6	0	6	0.3%	0	0
東京	7	0	7	0.3%	0	22
千葉	8	0	8	0.4%	1	4
埼玉	3	0	3	0.1%	0	5
群馬	3	1	4	0.2%	0	8
栃木	10	0	10	0.5%	0	3
茨城	1	0	1	0.0%	0	0
福島	4	2	6	0.3%	0	3
山形	16	0	16	0.8%	8	1
宮城	3	0	3	0.1%	0	1
岩手	0	0	0	0.0%	0	2
青森	6	0	6	0.3%	0	2
北海道	12	1	13	0.6%	0	10
九州*	1754	67	1821	89.5%	474	250
九州外	202	11	213	10.5%	10	419
全国計	1956	78	2034	100%	484	669

※無断転載禁止 ©日本の石橋を守る会 ※九州には沖縄を含む



西目林道第1号橋
熊本県人吉市木地屋町(橋谷川)
橋幅3.75m、径間3.4m
拱矢1.6m、環厚33cm
輪石13列
写真提供/費田 岳和



三号坂橋(仮称)
宮崎県都城市高城町四谷
径間1.8m、拱矢0.9m
環厚43cm、輪石9列
写真提供/費田 岳和

「田中橋」保存活動のこと

会員 森山良雄(熊本県)

熊本県山鹿市鹿北町にある単一アーチ橋「田中橋(たんなかばし)」,またの名を「化巖(けごんこう)車橋」(1858・安政5年架橋、橋長16・7m、径間12・7m、橋幅4・13m)が、県道拡幅に伴い、撤去されるという話が持ち上がったとき、「鹿北町の石橋を守る会」が発足した。地元住民約70人で反対運動を展開した結果、石橋のすぐ上流にコンクリート製の橋を架け、田中橋を保存することになった。「日本の石橋を守る会」にも、アドバイスをもらいました」と森山会員は当時を振り返った。

日本の石橋一覧表

副会長 末永暢雄(長崎県)

末永副会長は、日本全国の石造アーチ橋の一覧表のまとめ作業を報告。費田岳和会員(宮崎県)、森野秀三会員(滋賀県)、宮川康夫会員(奈良県)はじめ、多数の会員から集まった石橋情報は約1万件に上ったという。その一覧表は、会のホームページ(暫定)で紹介している。「めがね橋一覧」で検索すると表示される「めがね橋一覧(都道府県別現存数)」がそれである。データの使用などについては、末永暢雄(資料整理部)まで。
〒859・6322 佐世保市吉井町踊瀬720
☎0956(64)2710
honobono2@energy.ocn.ne.jp

KABSE調査研究報告

会員 中村秀樹(熊本県)

KABSEは、産・官・学が連携し土木構造に関するさまざまな活動を行う、土木関係技術者が中心となった一般社団法人。そのメンバーでもある中村秀樹会員が、現地調査の報告を行った。

「KABSE石橋点検要領案」に基づき、石橋のひび割れやアーチの変形程度などについて状態の数値化の試みを紹介。また重いトラックの通過による石橋への影響などの調査も実施しており、今後はそうした活動の結果を、石橋保存に役立てたいとしている。熊本大学の山尾敏孝教授(会員)もKABSEメンバーで、この活動に参加した。

中国・福建省の石橋を見て

会員 山尾敏孝(熊本県)

山尾会員は、中国の福建省福州で開催の「ARCH10国際会議」に出席。その際に訪ねた、現地の石橋について報告した。石造桁橋「洛陽橋」(1059年架橋、橋長1188m)、同「安平橋」(1138年架橋、橋長2070m)、会報78号掲載の「金山大橋」(1972年架橋、径間99m、橋長150m)などを紹介。中には長さ22m、縦横約1・3mの石材を連ねた石造桁橋もあったとか。福建省には石造桁橋や、石造橋のように見える疑似石橋が多かったそうである。

アーチ和算術

会員 中村幸史郎(熊本県)

「石造アーチ橋の輪石の設計は、大工の仕事ではないかと思ひます」と中村幸史郎会員。「道や川の幅に合わせたアーチ設計のため、江戸時代は和算が用いられたはず」と指摘した。和算は西洋数学とは別に、日本で独自に発展した数学。江戸時代初期の古文書に、円の直径やアーチの求め方が記され、和算が曲尺(かねじゃく)の使い方である規矩術(きくじゆつ)に取り入れられて、大工技術の要素となったことなどを紹介した。

眼鏡橋クイズ

会員 軸丸秀顕(熊本県)

石造アーチ橋の構造の発展について、軸丸秀顕会員が段階的に説明した。単純桁橋から複数の橋脚を持つ多径間桁橋、川の両岸から石材を延ばして桁を載せる刎橋(はねばし)、2枚の石部材をもたれ合わせた合掌(がっしょう)桁橋へと発展。そして合掌桁橋が方杖桁橋、リップアーチ橋、セグメントアーチ橋(輪石部分)を川の流れと平行に配置へと発展。その後、多径間アーチ橋が出現した。「眼鏡橋の技術はより長い橋を目指した先人の知恵の結晶」「高い耐震性能を持ち、単純に保存だけでなく活用の視点も大切。眼鏡橋を新設することも夢ではない」と締めくくった。

日本の石橋を守る会は1980

(昭和55)年、熊本県山鹿市で第1回大会を開催。その際は32名が参加しました。発起人は初代事務局長の山口祐造さん(故人)。石橋の保全運動は個人の力では限界があるので、全国各地にいる石橋愛好家と手を取り合い、強力な組織をつくって守らなねば...という思いからでした。

過去には存続の危機もありました。2000年鹿児島・東入来町開催の第21回大会は、井上清一会長(故人)と山口事務局長の2人が入院のため、副会長の片寄俊秀さんが

日本の石橋を守る会、30年の歴史

事務局長 上塚 尚孝(大会記念講演より)

会長に就任。翌年の福岡県久留米市開催の第22回大会で、事務局を熊本県に置くことが決まり、02年熊本・矢部町開催の第23回大会から本田義雄さんが会長に就任。それで安定しましたが、08年長崎・世知原町開催の第29回大会は会長・副会長が長期入院のため欠席、役員の若返りが課題となりました。昨年の熊本・山都町開催の第31回大会から甲斐利幸さんが会長に就任され、本大会で部の創設が決まりました。今後、会が充実し、深みが出てくることを期待しています。

小さな眼

会員 石井智大(熊本県)

石井智大(ちひろ)くんは2005年生まれ。母親の陽子さんが智大くんを紹介した。「智大が1歳のとき初めて書いた絵は、父親や母親の顔ではなく、通潤橋の放水の風景でした」「智大は石橋に行くとき大変喜びます」「小さな子どもが石橋が好きだとは思っていません」と陽子さん。石井さんは家族4人で、智大くんが1歳のとき、福岡から熊本の山都町に引っ越してきた。陽子さんは「最近ばかりでしたら、智大が私たち家族を山都町に連れてきたのでは...と思うことがあります」と語った。

画図小学校版画集

会員 石原史彦(熊本県)

石原史彦会員は、熊本市立画図小学校の教師。昨年4年4組の担任となり、「通潤橋と肥後の石工物語」(版画集)の制作を指導した。「社会科見学で通潤橋に行きました。子どもたちには放水しか印象に残っていません。授業で『虹の花咲く通潤橋』(児玉辰春著・長沢靖イラスト)を読んでやりました」と石原会員。「特に支保工が取り外されるところに、子どもたちは引きつけられていました」「それから自分たちで版画で物語を作成しようということになりました」と版画集作成のいきさつを紹介した。

平山橋撤去に「待った!」

会員 河村修(熊本県)

第32回大会で河村会員は、熊本県山鹿市の「平山橋」撤去問題について報告。この石橋は九州の人気温泉地、平山温泉の中心街を流れる岩村川に架かり、保存状態は良好。しかし石橋上流へのコンクリート橋架設に伴い、地元民の一部が石橋のために浸水被害が大きくなるという理由で、撤去を主張していた。

大会終了後、地元と平山橋保存を望む団体(※)とが協議を重ねた結果、石橋を現在の場所か、もしくは新しいコンクリート橋の上流部にかき上げし、歩道橋とするよう、熊本県に要望することで合意した。撤去問題は県との交渉に移った。

※平小城校区長、湯山区区長、平小城地区公民館長、平小城小学校長、鶴城中学校長、平山温泉観光協会、平山温泉組合組合、山鹿文化財を守る会、山鹿市文化財保護協会、日本の石橋を守る会



平山橋
1861(文久元)年架設、1914(大正3)年改修、橋長11.3m・径間7.0m・橋幅4.8m
写真提供/河村 修

【本の紹介】

日本の石橋・世界の石橋スケッチ集

片寄俊秀著

石造アーチ橋の謎と魅力

著者はあとがきに「長崎で石橋の魅力に目覚め、山口祐造さん(日本の石橋を守る会初代事務局長)に導かれて九州から本州へ、さらには世界各地をほつつき歩いて、石橋を見つけたら、そこに座り込んで描きに描いた」と記している。筆者が各地で描いた石橋のスケッチには、筆者の石橋への深い思いが表れている。後半は石造アーチ橋の技術の謎と魅力について考察を展開。長崎市の中島川石橋群の復興についても、著者の証言が記述されている。(広報部)



「日本の石橋・世界の石橋スケッチ集」
片寄 俊秀著
NPOほんまちラボまちづくり道場発行
頒価1000円
http://honmachila.exblog.jp/
katayose1234@gmail.com

▼かたよせ・としひで 1938年生まれ。奈良市出身。環境芸術家。1970〜96年まで長崎市に居住。工学博士、技術士、一級建築士。現在は大阪人間科学大学環境・建築デザイン学科特任教授。NPOほんまちラボまちづくり道場主宰。日本の石橋を守る会相談役。兵庫県尼崎市在住。

上に紹介した片寄俊秀氏の著書は、「福島第1原発事故」直後の本年4月に出版された。著者は「いま、石橋の時代」と題されたまえがきで、自身のこれまでの活動を振り返り、現代の社会に問題を提起している。左にその一部を紹介する。

いま、石橋の時代

(前文略)

石山から切り出した材に人の技を加え、持ち運びのできる部材にして現場で壮大な構築物に組み上げる見事なデザインと設計。地元材ゆえに地域の風景に自然になじむ、先人たちの知恵と高度な技術の結晶。これぞ長崎の宝もの、大切にしないとバチが当たると思った。

(文中略)

そして、心ある市民の方々と学生たちが一つになって、川掃除からはじまると「中島川まつり」を発明し、市議会請願や署名活動、河川浄化や洪水対策、環境デザイン、商店街の活性化、観光地再生など、地域をテーマとするさまざまな運動と研究活動を展開した。

だが当時、「経済の高度成長」に心を奪われていた人々は「どぶ川」化した中島川に架かる古ぼけた石橋などに何の価値も認めなかった。そしてその上には、東京や大阪にも負けない(！)立派な高架道路を建設し、それを「九州横断道路」と連結して物流ルートを強化し、クルマでやってくる大量の観光客を長崎に呼び込む。これが経済的に落ち込んでいた地方を元気にし、市民の暮らしを豊かに

する「近代化」の決め手になると、本気でそう思っていた。

まさに「哲学無き技術」謳歌(おつか)の時代。その動きに待ったをかけるわれわれは、「何でも反対のアカ教師とゲバ学生」と罵倒され、あいつらは「偏つとる」とのレッテルが貼られた。冷たい視線の中、当時の学生たちは一人ひとりがよく考え、よく行動し、よく耐えた。

いま、世界を揺るがす Fukushima 原発の1号機が建設されたのが、まさにその頃である。さまざまなおもしろい話と、ボスとその取り巻きの懐に大金がねじ込まれた過疎の村社会の中で、原発建設に抗した心ある人たちは、おそらく大変な目に遭ったことであろう。

(文中略)

先行きがまったく見えない日本。もう一度、原点からやり直すしかないことは明らかだ。われわれはそのためにこそ中島川や日本の、そして世界の石橋群をじっくりと見つめてみたいと思う。

先人たちが培った、人々の暮らしをしつかりと温かく支える「ほんもの技術」の結晶。この物言わぬ石橋たちこそ、われわれにほのかな希望の灯を与えてくれそうな気がしている。
(2011年4月記す 片寄俊秀)

【本の紹介】

霊台橋 秘められた幕末の黄金比

一村一博著

霊台橋と黄金比の秘密

江戸末期に架設(1847年)された、当時最大の単一アーチ橋「霊台橋」(熊本県上益城郡美里町)に巡り会い、衝撃を受けた筆者。石橋築造の技術、阿蘇の自然の恵み、架設当時の時代背景などが気になり、資料を集めたという。霊台橋を日本の石造アーチ橋の中でとても大きな存在であると位置づけている。

架橋に関する資料をはじめ、その美しさの秘密の1つに、1対1・618の「黄金比」が隠されていることを紹介。霊台橋には不思議な霊力(パワー)が秘められていると述べている。霊台橋を中心に据え、情報を分かりやすく紹介した石橋研究書。(広報部)



「霊台橋 秘められた幕末の黄金比」
一村一博著

熊日情報文化センター発行
頒価1500円+税

▼いちむら・かずひろ 1949年生まれ。熊本市在住。くまもとインターネット市民塾講師

石橋構築・修復技術者養成へ

石橋は江戸期から明治・大正期にかけ数多く造られた。時を経てそれらの多くは、修復が必要になっている。また近年はコンクリート使用などにより、復元が不可能になる修理事例も多発しており、真に適切な対処が望まれる。ただ、石橋構築・修復にたけた専門技術者は限られており、現代ではそうした技術者の育成を、伝統的な徒弟制度だけに委ねるわけにはいかない時代となっている。

4月に開催された第32回総会の時点では予定が発表できなかったが、各方面の専門家・経験者・識者などの協力を得られる見通しが立ったことから、尾上

一哉総務部副部長を中心に、「石橋構築・修復技術者育成事業」が推進されることになった。

技術者育成コースは、本年8月20日から始まり、座学と実習、現地見学などにより、基礎的な知識と必要な技術の基本を学ぶ10回コース。毎回土曜の10時から15時までで4つの講座が用意される。現在、各専門分野における一流の指導者を手配しているところである。

熊本には種山石工の技術の流れがあり、熊本城の石垣はじめ各地に教材にできる石積みが残っている。石橋構築・修復技術者育成事業は、専門技術とともに石造文化を後の世に伝えるためにも、意義深い取り組みである。(広報部)

石橋構築・修復技術者育成カリキュラム案

【第1回】8/20(土) 「心構え」(座学)	肥後種山石工集団、伝統的自然石組 石橋石組技能要領など
【第2回】9/3(土) 「基礎1」(座学)	石材の種類と性質1、石材(現物)と用途 損傷を受けた石橋など
【第3回】9/10(土) 「基礎2」(座学)	石工用語、石組みの種類 石組みの面・控え・裏込など
【第4回】9/17(土) 「山取り」(実習)	山を見る目・石を観る眼 石材の採取方法、山取り上の諸問題など
【第5回】9/24(土) 「細工」(実習)	作品と石工道具 割る、はつる、作る
【第6回】10/1(土) 「石組み1」(実習)	石組み要領 熊本城石垣修繕現地講義など
【第7回】10/8(土) 「石組み2」(見学)	県内石垣見学
【第8回】10/15(土) 「石橋1」(座学)	眼鏡橋の過去・現在・未来 石橋の設計、施工計画など
【第9回】10/22(土) 「石橋2」(座学)	支保工、基礎・根石・輪石・要石 壁石・中詰石・貼石・高欄など
【第10回】10/29(土) 「終了考査」	石造文化財の要点、終了考査 石工の基本(石組み)、口頭試問

※受講料は基本的に無料
 ※毎回土曜開講、10時～15時までに4つの講座
 ※会場は山都町立図書館1階(熊本県上益城郡山都町城原169)ほか
 【問い合わせ先】
 東陽石匠館 ☎096(65)2700、通潤橋史料館0967(72)3360

BBS(インターネット掲示板)より 通潤用水ウォーキング

投稿者 会員 田上 彰(熊本県)
 5月14日に参加者23名で、上益城郡山都町の笹原川取水口から上井手終点の相藤寺までの「通潤用水」を歩きました。通潤用水の施工の工夫について、今回あらためて感じたことを記しておきます。

隧道(ずいどう)の中の土砂堆積(た いせき)を予防するために、隧道入り口の用水幅を狭くして水圧を上げる工夫がなされています。菊池郡菊陽町の「鼻ぐり井手」は、水の通る穴を互い違いにすることにより渦をつくり、土砂の堆積を予防していますが、それと似た水理を利用した工夫がなされています。要所には、大雨等によりオーバーフローした余水を排水するための「磧切戸水吐所」、いわゆる余水吐けが設けられ、これにより水路自体の擁護が図られています。

また、一般の水路の場合は、上流の耕作地が先に取水するため、下流の耕作地は、おのずから用水が足りなくなります。しかし、通潤用水の場合は、用水不足となる危険がある場合は、「昼夜開き」と称して下流まで用水が平等に行きわたるよう地区を定め、1日おきに配水しています。

通潤用水の上井手から分水された

「日本の石橋を守る会」のBBSへ投稿を! <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/> パスワードは「1234」



▲菊陽町の「鼻ぐり井手」。用水路途中の岩盤(長さ約390cm)を掘削し、3〜4日間隔に水流穴(鼻ぐり穴)を空けた隔壁を設けている。隔壁にぶつかった水流が、火山灰などの土砂を巻き上げて流すため、しゅんせつ作業がいらぬ。写真提供/中村まさあき

用水が沢ごとに棚田に注ぎ、田越しに次の田に流れ落ち、下井手と合流し、さらにその下流の田を潤しています。しかも、途中の棚田は、ため池の役割も果たしています。すなわち、下流になればその分だけ水量が少なくなるにもかかわらず、この通潤用水の配水システムは、下流であってもできるだけ同じ水量が得られるという、平等性を確保する工夫がなされています。

一方、分水箱による公平性も見事なものです。呑口の大きさが開田面積に比例して定められています。この平等性と公平性との調和が設備などのハード面だけではなく、布田保之助(通潤橋架設時の惣庄屋)さん時代から守られてきた規約に見られる、ソフト面にまで反映しているところが通潤用水のすばらしさだと感じました。

石工・文作・豊吉親子のこと

石匠館へ来館された3人連れが「私も文作の子孫です」とおっしゃった。「文作さんといえば、通潤橋の架設工事に参加した種山石工衆の一人ですね」と確かめると、「はい、いまは(熊本県球磨郡)相良村役場の近くに住んでいます」。そこで3人を館内に展示している「種山石工衆の系譜」へ案内した。

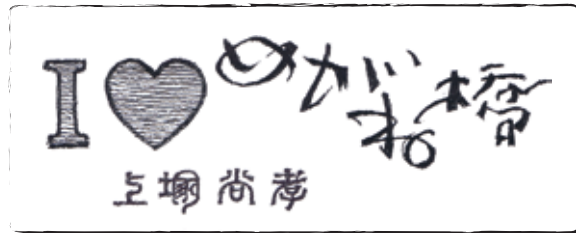
文作の生没年は不詳のため、工事に参加した時点の年齢が明確ではない。私は20から30歳代ではないかと推測している。通潤橋完成から28年後の1882(明治15)年に石本文作は、息子の豊吉と種山村から深水村(現在の相良村)へ移住し、明治末期に「橋谷橋」を架設した。この親子合作の石造アーチ橋は、川辺川の一支流に架かっていたが、村道改良工



橋谷橋 写真提供/上塚 尚孝

事のため撤去され、現在は相良村役場敷地内に復元保存されているから、見た人も多いはず。

子孫の一人である石本則広さんは「橋谷橋が橋谷川に架かっていたときの写真はアルバムに貼つとりますが、(移転後の姿と違い)高いアーチでした」と誇らしげ。しかし「橋の凶面は残つとったで



すばつてん、藁(わら)屋根の家が台風で壊れたときなくなりました」と話したときは残念そうな表情だった。

文作の息子の豊吉の作品は、あさぎり町(旧深田村)の銅山川に架かる「大正橋」(1913年架設)。

輪石、壁石ともに整然とした構造は、石工の性格が几帳面であったからだと想像している。豊吉自身も会心の出来だったらしく、「大正橋は見てくれ」と語っていたそうだ。豊吉の没年は1933年で、享年72歳と判明している。

2008(平成20)年夏には、通潤橋架設工事に参加した石工、岩吉さんの子孫が石匠館にいらしたし、今回は文作さん

の子孫。いずれも架設工事参加者の末裔(まつえい)が健在で、次は誰かとたのみだ。(2011年6月4日)

円相の秘めし力

「天災は忘れた頃にやってくる」といわれる。阪神淡路大震災から16年目、東日本を襲った地震は、大津波に加えて原子力発電所の事故まで引き起こした。この天災に人災までが加わった未曾有の災害は、日本の終戦以来の大混乱、大惨事となってしまった。

本年4月末、八代市の知人宅に身を寄せているという被災地の老夫婦が、石匠館の見学にいられた。「大変なことでしたね」と慰めながら話を聞くと、老夫婦の家は高台にあつたので津波の被害はなかつたが、福島第1原発から30km圏内に位置するため避難対象になつたとのことで、気の毒だった。

お二人には石匠館の多目的ホールに展示していた「めがね橋に用いられた石材」展も見学していただき、置いていた芳名録へ記帳してもらつたが、それで福島県南相馬市の方だということが分かつた。添え書きには「原発の被害を忘れ、めがね橋の美しさに見とれました」と書かれていた。ニュースなどでは南相馬市の放射能被害のことを見聞きしていた

が、その感想を読んでハツとした。日ごろから石造アーチ橋に心を惹



霊台橋(熊本県上益城郡美里町) 写真提供/上塚 尚孝

(ひ)かれていたけれど、災害で痛めつけられた人の心を癒す力までも石橋は秘めていたのかと、しんみり考えた。

私自身、若い頃に霊台橋の強大なアーチが川面に映り、円相を描いているのを見たとき、その美しさに感動し、見惚れたことが忘れられない。以来、疲労蓄積したとき、閉塞(へいそく)状態のとき、放心彷徨(ほうこう)のとき、舟津峡を訪れては、石缸(せつこう)が川面に映す円相と対峙(たいじ)し、何かをつかもうと時を待った。

被災地の復興と被災者の安穩が1日も早からんことを祈念してやまない。(2011年6月2日)



右のラベルは、第32回大会が開催された山都町の老舗酒蔵、通潤酒造の純米酒のPBラベル。お酒は特別に注文され、大会夜の懇親会で乾杯に使われた。このラベルの写真は、パソコンによって「通潤

見たり、聞いたり、

会員 井澤るり子(熊本県)

下鶴橋の名残

霊台橋よりも前に架けられ、1965(昭和40)年に流れてしまった「下鶴橋」(下津留橋とも表記。熊本県上益城郡美里町豊富)。その後近くに、コンクリート製の橋が架けられたが、その橋の上から川の左岸上流側を見ると、今もアーチの一部が残っているのが見える。

石橋の近くの川には淵(ふち)があるため近づくのが難しいが、川に茂る竹や雑木が住民によって切り払われてから、



流失前の下鶴(下津留)橋
写真提供/上塚 尚孝(1957年3月撮影)

橋の残骸が見えるようになった。下鶴橋についての吉田通雄さん(故人)の述懐は悲痛だった。橋が流された後、地域の住民から一日も早く、修復してほしいとの願いが出された。しかし石橋の修復には時間がかかり、技術者も少な

石橋に関する催し

東陽石匠館

熊本県八代市東陽町98-12

☎0965(65)2700

◆8月2日～9月4日

熊本市立画図小学校・旧4年4組「通潤橋と肥後の石工物語」連作版画展

◆9月6日～10月10日

石原史彦・鉛筆と水彩色鉛筆による

「石橋と草花スケッチ」展

◆10月14日～11月27日

榊晃弘(寄贈)「ローマ橋と南欧石橋紀行」写真展(第3回はポルトガルの橋を中、心に紹介)

かったため、住民の要求に応えることができなかつた。そのため、やむなくコンクリート橋を架けることになったそうである。

工事が始まり、アーチを壊そうと、バツクホー(油圧ショベル)を動かしたが、びくともしなかつた。それでついに火薬を使って爆破し、石橋を取り壊したそうである。

吉田さんは「今なら他に道路もあり、回り道もできるので、爆破して壊すこともなかつたらう」と語った。現在では下鶴橋から見える範囲に、「今村橋」「塚瀬橋」などコンクリート橋が3橋も架かっている。

編集後記

会報の編集・制作を引き受けて以来、関係者皆さんのご協力のおかげで、何とか79号の発行にこぎ着けました。印刷に回す直前の時期になって会報の各面を見ると、会員の皆さんの石橋への思いは深く、その活動内容が幅広いことをあらためて感じます。それは石橋文化の豊かさの反映でもあると思われれます。

情報では島崎敏之会員が個人的に、沖繩の石橋巡りワガママツアー(?)を企画中だそうです。会報ではそのような、多彩な活動を紹介したいと考えております。ただ紹介できるスペースには限度がありますので、会のBBS(インターネット掲示板)への投稿もお勧めしたいと思います。(会報担当 中村まさあき)

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報79号(通算) 2011(平成23)年7月10日発行

代表者 会長 甲斐利幸

事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2

通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360

HP <http://www10.plala.or.jp/narit/>

BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>